

第10分科会 地域資源活用型まちづくり(午前)

「地域の資源を見つけて活かす」

【コーディネーター】

同志社大学大学院総合政策科学研究科 客員教授 谷口知弘

【話題提供者】

- ① 「『ない』なら『作る!』住民主体で始まった小水力発電」
殿川小水力発電研究会 副代表 吉村耕治
- ② 「都市近郊農村におけるまちづくり」
NPO 法人わづか有機栽培茶業研究会事務局 和束町地域力推進課 馬場正実
- ③ 「都市部～山間部より排出される木質系廃棄物の資源化及び有効活用」
(株) 都市樹木再生センター 環境事業部 辻元真由子
- ④ 「地域資源を活用した地域の活性化～郡山城下町の取組を事例に～」
奈良県県土マネジメント部まちづくり推進局地域デザイン推進課都市計画室 主査
なら・まちづくりコンシェルジュ 甲賀晶子

【会場】北コミュニティセンターISTA はばたき

谷口:この分科会は午前と午後の2部校正となっている。午前は事例から学ぶということで「地域資源を活かす」とはどういうことか、「地域に活かす」とは誰が活かすのか行政の役割とはということ、みなさんと一緒に考えていきたい。午後は生駒をフィールドに地域資源を発見する「まちあるき」を実際に行う。

今日は「地域資源を見つける・活かす」が大きなテーマとなっているが、遠方から持ってこずとも自分の住む足下に素敵な宝はある。見つけていこう、活かして行こうと言うが、それは誰が見つけるのか、誰が担い手になるのか、また、どうやって進めて行くのかという方法について考える。行政の役割として何ができるのか、やっちはいけないことは何なのか、行政の功罪含めて議論できればと思う。



谷口 知弘

「誰が」というところで自分のエピソードを2つ紹介する。私は京都の出町ホテルの会で活動をしていたが、前滋賀県知事嘉田氏がまだ精華大学の先生をされていた頃にお越しいただき、滋賀県のホテルの活動についての話を聞いた。ホテルについて調べようと地

元の人に提案したところ、住民はホテルはいないと言うので「いないことを明らかにしよう」と、ホテルの調査をしたところ裏山にいっぱいいた。地元の素敵な地域資源であるホテルはいなくなったのではなく、実はホテルを見る人の目がなくなっていたということが分かった。この話を聞いて、「土の人」がもう失ってしまったと思っている地域の宝を見つけたり見つめたりする「風の人」がいて、さらに環境という専門の目を持った人が入ることで見つけ出せるのではないかと感じた。

もう一つ、自分が育った宇治田原町岩谷という地域ではお茶のまちづくりをしている。去年の秋に大学生にフィールドワークに入ってもらったところ、郷土料理の茶汁（みそ、野菜、番茶をかける）の話から、学生はお茶どころならお茶漬けを作れないかといいた。しかし、地域の方は半信半疑だった。実際にやってみたら美味しかった。しかも、近所の方は茶汁を知らない人もいた。そこで、もう一度茶汁を見つめ直そうという取り組みをすることになった。風の方の視点、若者の視点、若者の勢いが新しいものをつくっていくと思った。

今日の進め方は、話題提供者からの話の後、話題ごとに4つのテーブルを設定し、関心のあるところに集まり論点を話し合ったり質問したりする場を作る。最後にテーブルで話し合ったことを発表する。地域資源を見つけ活かすときに、誰がどうして見つけ活かすの

か、行政の役割とは何だろうかということをもとめたい。

●話題提供① 吉村耕治『『ない』なら『作る!』住民主体で始まった小水力発電』

吉野町に移住して来て4年目になる。殿川集落は何もないところ。でも、本当に何もないのかという視点を持っていただきたいと思う。北はすぐ宇陀市になる吉野のはずれの東の端にある小さな集落が殿川だ。山に囲まれ木はいっぱい、鳥や虫もいっぱいいる。

村のメインストリートにある集会所・公民館の前で水車をまわしている。今から20~30年前は周辺一帯に果樹園があったところと聞いている。殿川は戦後昭和22年に開拓された開拓村で、入植者は田畑や果樹園をつくり現金収入を得ようとしたが、果樹が育つまでは数年かかり苦勞もされたと聞いている。リンゴ、ナシ、モモ、スイカがとれ奈良県下でも名が知られていたと聞いている。しかし、子どもたちは村外に出て行きなさいと教えられ、果樹園の後継者はいなくなり果樹が杉に変わった。

山の中で雪が降る、大風が吹き木が倒れて断線し、停電がおこる。ひどい時は携帯も使えず簡易水道もなくポンプアップして水を使っていてトイレも流せない。命に関わることもある。地区は標高500mのところであり、数年前には80cm積もったことがある。降雪は年数回のことで雪対策を何処までするかを見極めるのは難しい。

住民はみんな「外に出て稼いでこい」と言って子どもたちを育てた。人口の7割が70~80代のお母さん、その次に若いのが64才の区長さん、その次が地元生まれの50才の方。この方も実は町外に住んでいるが、実家と家業があ

るので毎日通っておられる。40代はいなくて30代は私たち夫婦と区長さんの娘夫婦となっている。10年、20年先がどうなるのかよく見える。住民は全域で20人しかいない。建物がそのまま朽ちているところもある。私が殿川と関わりはじめた3年前から今までに2人亡くなっている。これからわが村をどうしようというところから気づきを得たわけです。

ところで、住民が少なく区費を集めても少ないし、街頭設置は費用がかかるので設置してこなかった。しかし、それでは災害時にお年寄りが集会所、避難所まで逃げるのは大変だということで、街灯がないのはどうかということになった。自治会三役は、お年寄りの不安や寂しさをやわらげたいと考えた。関電から100%電気を購入していたのでは不安や腹の立つこともある、自分たちで出来ることがあるのではという声が出て来て、小水力発電、太陽光発電など自分たちで電気は作れるのではないかという話になった。街灯がなく暗いので、集会所の前の小川を使って小水力発電でもやって懐中電灯を照らしたらというところから始まった。

見渡すと公民館の前に生活雑排水を流す水路がある。そこで発電しようという小さな一歩から始まった。地区の中に堰があり、そこから20mほど行ったところに防火水槽がある。そこに水が送り込まれている。水槽からあふれる水で水車をまわせばいいのではということになった。1号機ができあがった。自転車の車輪の真ん中に発電機がついている。車輪の周りには100円ショップで購入したトレイ10枚程度をつけた。支えは、ホームセンターで購入した建材を活用した。身近なところで安く手に入るものでつくろうというコンセプトで、ランプ1個分しか点らないが丈夫で1年以上使えた。次

は、防火水槽からあふれた水を利用して回っている2号機木製水車。区長さんの山の木を使った。身近な自分のところの山で手に入る木だ。

このような取り組みからやや遅れて吉野町小水力発電協議会ができた。協議会のPRの結果、2年前2013年には300人を超える視察者が来た。王寺町のサロンをしている女性が多く来たときは華やかだった。普段は鹿やイノシシの方が多いかと思われるくらいだが、視察の人が来ると華やぐ。

小水力発電研究会の会長は重度の身体障がい者、日頃の移動は自動車か電動車いす、工夫次第でこんなところにも住めるということを実践されている方。電気回路や水車の設計が担当。殿川をどうするかという考え方にも魅せられて自分もここに住みたいと思うようになった。



吉村 耕治

さて、日々の見回りや掃除をしないと水車は止まる、ベルトも切れる、冬になると凍っていることもある。木製水車は腐っていく、木の厚みが減って水がこぼれていく。数年後には交換しないとイケない。しかし、なぜ厄介なことをするのか。その厄介事も踏まえて自分の村を考

えないといけない。研究会で水車を作って維持していくことは決まったが、自分は同じような世代に入って来て欲しいという思いもあった。研究会の3人のアイデアに加えて、福祉と防災の研究村という考え方、移住してくれる人、研究者に来てもらおう、定住や交流が始まらないかと考えた。

持続性のあるものづくり、村づくりのために、あるものがしをしてください。小さな一歩を踏み出してください。私は自転車を回してその電気を使ってトランジスタラジオを鳴らしたことがある。中学生でも出来ることなら当然大人もできる、自分の村にはこれしかないと尖って下さい。そのような姿が見えると、移住者の人は「面白い、顔が見えるな」と感じるはず。そうなるに関心のある人が集まってくる。いろんな人が集まれば知恵も集まり活動も活発になってくる。今度はこういう人に来て欲しいという、ドクター、看護師、介護ができる人に来て欲しいと逆指名できるようになって欲しい。活動は一輪の花のように最初はポツツとひとつから始まっていく。それが魅力になって広がれば、いろんところで花が咲いている華やかなまちになって行くはず。

参加者：最初の発端となったメンバーはどのような住民だったのか。

吉 村：住民と言っても70代～80代のお母さん方がほとんど。発端となったメンバーは自治会三役だったので意思決定が早かった。自分は電気工事ができるということで偶然入れたようなもの。木製水車でつくった電気は公民館に供給できる電気、その工事をして自分の居場所を見つけた。

参加者：トレイからお玉に変えたのはなぜか。台風が来たら大変なのでは。

吉 村：水をたくさんしっかり受けたいという考えで最初トレーを使ったが、スピードが思うように上がらず、効率がよくなかった。そんなある時、水車を回すと風が顔に当たることに気づいた。幅の広いトレイは水を切ったあと空気抵抗が大きい。水は受けても空気抵抗が少ないものを考えるとお玉になった。車輪を使ったものは移動できる、大雨が来そうな時は引き上げる。木製水車は水があたる方向を少しゆがめている。水が横からあたる横がけの形になっている。

参加者：移住のきっかけは何だったのか、家族の反対はなかったのか。

吉 村：母の郷里が和歌山県海南市で、幼稚園時代の1年を過ごした。前の職場も田舎で、田舎で住みたいという思いはずっとあった。その職場で、田舎の人の暮らしや考え方は学んだ。吉野へは奈良県立大学時代の恩師から紹介があり引っ越しして来た。稼ぐことができればいと家族はついて来てくれた。借りた家は築20年程のログハウス風の家、傷みもあって問題は起きるが、そこに住んでいる。

谷 口：よそ者であるということに加えて専門性をもっておられる。地域にもご自身にも役立っている。

●話題提供② 馬場正実「都市近郊農村におけるまちづくり」

宇治茶の府内生産の約45%が和東でつくられている。この茶業組合のお茶を有機でつくったらどうだろうと有機茶業研究会となった。実

は、嘉田先生が精華大学で教授をされている頃、和東でワークショップを開いてもらい「ないものねだりより、あるものさがしへ」という言葉を聞いた。嘉田先生は河川が専門、水が専門ということで、28年災害の災害ワークショップを開催した。その時に、和東にはたくさんのいいものがあるのに、なぜ「ない」と言うのかと指摘されたのが始まり。そこから地域資源を活かした新しいまちづくりをしたいと思った。それが、NPO法人に入るきっかけとなった。

和東町の場所は京都の一番南の端、宇治田原の隣。京都府の宇治茶の最大産地。鉄道は通っていない。人口4,330人、世帯数1,700人、65歳以上が住民の38%で少子高齢化が激しい。産業はお茶で、自慢できるのは京都府でトップであること。茶園面積は府内の37%を占め府内生産の45%の茶をつくっている。甜茶の生産は全国トップクラスだ。今言っていることは全て私にとっては自慢だが、地元の人はこのような自慢を一切しない。いいことはいっぱいあるのに見過ごしてしまっているということだ。それに後々気づいていくことになる。



馬場 正実

さて、宇治茶の茶畑の景観を「京都市景観遺産登録」第1号にしたいと、役場から申請しよ

うとしたが上司から反対されたという経緯がある。理由は、「住民から反発がでる。批判しか出ない」と止められた。そこで、役所ができないならNPO法人有機栽培茶業研究会からと申請した。ある日、富士通の京都営業所の方と2人でまちを歩いて茶畑の前に来た。「こんなにいいところがあるのに、なぜみんなにこの景観を見せてあげないのか」と、その時言われた。自分にとってみれば普通の茶畑、実はつくりにくい等高線につくった茶畑でもある。美しい景観は読売新聞でも誌面の半分の幅を占めて掲載され円形茶園として有名になった。平成20年1月24日にNPO法人有機栽培茶業研究会で京都市に登録。その年の3月には京都府の文化的景観にも選定される。それでも行政はなかなか動かなかった。しかし、この茶園の持ち主が軽トラの荷台に円形茶園、文化的景観に選定ということと合わせて自分が持ち主だということと合わせて自分が持ち主だということと合わせて自分が持ち主だということを貼りだした。つまり所有者はその茶畑を誇りに思ったということ。地元の人が自分たちのやっていることに誇りを持ってくれたということが嬉しかった。ようやく町も動きだし、京都府も動いて日本遺産の指定のひとつになった。

これは、まちの人が言った言葉がきっかけで、地元の人が誇りをもち、行政が動き出して、日本の世界遺産のひとつになったという例。NPO法人美しい村連合への加盟も景観がきっかけだった。早稲田大学が和東町でいろいろな提言を始めてくれたのも有機茶研の動きからだ。湯船森林公園があるが、ここは山を行政が整備したけれど何も使えないままに放っていたところ、そこを民間が使い始めてくれた。全天候型のオールシーズンマウンテンバイクのコースは和東にしかない。2020年のオリンピックに何かで使いたいと思っている。地元の人

とよそ者とで一緒に考えて行きたいと思っている。

和東茶カフェというのがある。初めのコンセプトは、地元のおじさんが自分たちでお茶を持って集まって来てうんちく話をして、それを訪れた人が聞いてお茶を買って行くという場を想定していた。しかし、購入したい人のほうが多くなり今は和東茶カフェになり、アンテナショップとなっている。道の駅としてスタートしたが、その価値が地元の人に伝わらず今の形となった。半年後には、朝日新聞も紙幅をとって和東茶カフェを取り上げた。

和東の見どころをいっぱい書いてあるものがある。自分たちにとってはあたりまえのことばかりだが、地元の人がみんなから聞いてたくさん情報を集めてくれた。

NPO 法人有機栽培茶業研究会のメンバーは現在 22 人、活動としては、国際ワークキャンプ、社会人ワークキャンプ、週末ワークキャンプを行っている。この山を守りながら外からいろんな方に来てもらい得た気づきを外に向けて発信、地元のいいところを外の人に教えてもらいながら、PR もしてもらおうというもの。何がいいのかわからない地元の人たちにも、ここがいいと気づきを与えてもらおうとしている。

以上が、茶業にプラスして重点を置いている活動。設立の目的としては、茶を中心とした有機栽培の研究等と緑茶の生産、消費者を通じた文化の交流だが、地元の基幹産業を通じた活動をしてこうと考え、京都以南では第 1 号の農家民宿が形となった。農業体験をしてもらい茶文化に触れてもらう機会としている。環境フェスティバルで NPO 法人ナイスという団体の人と知り合ったのがきっかけとなり国際ワークキ

ャンプなどを行うようになった。他に有機認定の勉強会をやり、援農アルバイトの紹介もしている。農作業がしんどい、高齢化が進むという中で、近所の学生たちが 1 時間 1,000 円のアルバイトをするということがシステム化され「和東な時間」として動いている。農家のおじさんたちもエコファーマー認定を取ろうとしている。出会いと連携、どこかと連携しながら地元の人と都会の人が一緒にやろうとしている。

「ないものねだりから、あるもの探しへ」という言葉に出会ったとき、何とかしていくことが自分の仕事だと思い、中でできないなら外ですると飛び出したが、内子町の岡田さんに 40 年やってもたかがこれだけしかできないと言われ、ゆっくりやっていこうと思った。和東には茶業を中心とした企業、茶商がなかった。他力を知って他力を信じて他力とともに何かをしないとできないと知った。

めざすのは三流の都会ではなく一流の田舎、めざすために一流の田舎とはどんなものか考えている。世界遺産の挑戦までいきたい。一流の若者は外へ出ていってもいい。応援してくれる若者をどう引っぱりこむかが大事。行政の役割は机の上で考えているだけではできない。行政がやるといろんな制約がある。地元の人がやったことがメディアに取り上げられている。行政が全部作って何かやってくれというと、何かひっかかると行政頼みになり、依存してしまう。自分たちで工夫しながら積み重ねて来たことなら、進み方が遅くてもやりとげしてくれる。他所者と若者と馬鹿者が必要。そして自分は現場で動くことが大事だと思っている。

参加者：ワークキャンプのメンバーはどのような人か。茶葉農家の後継者はどうなって

いるのか。

馬場：ワークキャンプは農業ボランティア、2～11月まで手伝ってくれている。町が持っている農作物の維持管理をする作業もある。イベントの支援スタッフもやってくれている。今年から2ヶ月間、無償で農家に入ってくれている人もいて半分は外国人。知り合ってもらって友達になって産地を自慢して欲しい。口コミで良さを外に広げて欲しいと思っている。農家の後継者は、300軒のうち100軒が特農家。後継者は50歳以下が50人いる。でも、現在支えているのは50～60代。これは強みでもあるがこのままではダメだと考えている。土地は所有者、作るものは耕作者のものという使い分けをしっかりとできるよう、新規就農ができるよう行政施策をつくりたいと思っている。

●話題提供③ 辻元真由子「都市部～山間部より排出された木質系廃棄物の資源化及び有効活用」

弊社は大阪府大東市にある木質廃棄物のリサイクル会社。都市部で発生する木質廃棄物を適正処理し、それを何とか有効活用ができないかという思いのもと生まれた会社だ。平成14年5月の創業以来、木質廃棄物に特化したリサイクル会社として産業廃棄物、一般廃棄物の再資源化処理を行ってきた。また、廃棄物の処理だけでなく手入れが行き届かない森林の整備や、再資源化した木質チップを利用した発電事業を現在行う予定で計画を進めている。大阪府大東市龍間地域という阪和道路沿いにあり、生駒市とはご近所という間柄。都市樹木再生セン

ターの近所にはBPS大東という木質バイオマス発電所を建設中だ。

木質資源というと山間部にあると思われるが、都市部、都市近郊部にも多く存在する。それらを有効活用し、それが山間部を守ることに繋がれば良いという考えから、企業理念として「都市を活かして山を守る、木質資源の循環利用で地球環境の未来を拓く」を掲げている。この企業理念を守るために大切にしていることが2つある。1つ目は、木質資源を余すところなく利用するということ、2つ目は適材適所の有効活用をめざすというもの。この2つのポイントを押さえた事例を紹介する。

まず廃棄物の再資源化について、グリーンリサイクルシステムとっている。街路樹などからの剪定枝等の一般廃棄物は一般廃棄物再生利用業の指定を戴いている自治体においては、回収から再資源化まで弊社で一括して行っている。回収し堆肥やマルチングチップに再資源化した後は、廃棄物の発生自治体で利用してもらっている。一般廃棄物の再生利用業の指定は大阪府内の5自治体からもらっており、6月にはさらにもう1自治体増えることになっている。事業活動に伴って生じる産業廃棄物(伐採材、解体材の木くず、企業活動で排出される木パレットなど)も再資源化処理をし、住宅建築の部材で使われる原料チップ、木質バイオマスボイラーで使用される木質チップなどに利用できるよう再資源化処理をしている。重要なのは選別。持ち込まれるのは枝葉、幹、根っこなど樹木廃棄物、そして家具、パレットなどの木くずなどの木質であるものは受け入れているが、再資源化する前に選別し綺麗な状態のパレット、幹等は住宅建築の部材になる原料用チップに、枝葉や根っこ、古びた家具系の木くずは

燃料用チップに、さらに樹木廃棄物だけを破碎してでる細かな形状のものは発酵させ堆肥にする。事務所でも堆肥を販売している(家庭菜園にも適している)。このように、適材適所の有効活用には性状ごとの選別が行程で欠かせないと考えている。

続いて、山間部・都市近郊部の山において活用されずに眠っている木質バイオマスの活用について。健全な森林を維持するためには光がふりそそぐ明るい山にする必要がある、間伐をして木が元気に育つスペースを確保することが必要だが、現在の日本の森林は手入れが行き届かず放置された森林が多くある。放置された森林の環境を改善するお手伝いができないかと始めたのが森林整備事業。生駒市のすぐそば、信貴スカイラインから入ってすぐの大東市中垣内というところにある山。自治会のみなさんが共同所有する10haの山林だが、地形が急峻であったり、所有者の高齢化により手入れができない状態だったのを手入れを手伝うということで始めた。最初は暗くて鬱蒼とした山だったが、間伐や枝打ちをして手入れをし、明るく光が届く山になった。

せっかく整備をしても山主さんが山に入れないと意味がないので、軽トラックなどで簡単に入って行けるような道の整備をする手伝いもしている。整備の際に出た枝葉、幹も再資源化処理をして有効活用している。

次に間伐材の利用について。間伐材搬出モデル利用事業、間伐搬出利用プロジェクトの2つは大阪府と共同で行った事業だ。山から木を切っても高く売れず切った木を出せないままにしていることが多い。そこで、山主さんに山の下まで下ろしてもらい、有価材として購入した。また、破碎機を現地に持ち込みそこで砕いて原

料用チップをつくり、木質ボードの事業者へ直接納入した。また別の事例では、弊社が保有している林業用の車で搬出の手伝いをし、有価材として購入した木材を破碎したあと原料チップの加工後、木質ボードの事業者さんに納入するということを行っていた。森林整備の際に伐採された幹など、中垣内の例、原料や燃料チップに加工して有効利用している。



辻元 真由子

大事にしている考え方は、カスケード利用で多段階に最大限利用すること。A材は柱や梁材になる、その役目を終え廃棄物になると次に木質ボードの原料として使える、その後はさらに木質燃料として使える・・・というように、カスケードは資源を一度だけの使い切りにするのではなく、使い終わった後も別の用途に使用する。これが適材適所の有効活用と考えている。また、山に眠る木質バイオマスだけでなく、先に紹介した廃棄物資源の活用全体に言えると思う。廃棄物の資源も状態の良いものは原料用のチップとして再資源化し、役目を終えてさらに廃棄物になったときに今度は燃料用として利用されるという多段階での有効利用を基本に考えている。一番ランクが低いD材、林地残

材を今後発電事業で有効利用して行きたいという思いがある。

新たに計画している木質バイオマスの発電事業について。木質バイオマス発電事業会社としてBPS大東を立ち上げ、現在木質バイオマス発電所を建設中だ。一般家庭、街路樹、道路建設、解体に伴い発生する木質系の廃棄物や山間部の未利用材を都市樹木再生センターにおいてバイオマス燃料として資源化する。それを利用してBPS大東にてカーボンニュートラルのクリーン電力としてエネルギーに生まれ変わらせる。近隣から出る廃棄物や林地残材などを燃料チップ化して利用することで、環境負荷への低減、地域への貢献ができる。また、電力は長い距離を移動すると損失が発生するので、消費地で発電した方が効率も良くなるという利点がある。現在稼働中の木質バイオマス発電所はあるが、多くは林業圏で林業が盛んなところに位置し、山間部で発生する山間未利用材のみの使用を行うところが多い。BPS大東は、都市部に位置する立地を活かして近隣から発生する廃棄物由来の木質チップを多く使用することで、地産地消型のエネルギーを生み出し、みなさまの生活のお役に立てればと考えている。BPS大東で生み出された電力はFIT制度により売電する予定。木質バイオマスは何由来かによって4つの価格帯が設定されている。山林未利用由来のもの、一般木質バイオマス由来のものは、どこでとれたものか由来の証明を付けないと32円/kWhと24円/kWhで販売できない。そこで、適正に間伐材、一般木質バイオマスを扱える事業者だというお墨付きとして事業者認定をもらっている。

都市部には都市部に、山間部には山間部の木質バイオマスがある。都市樹木再生センターは、

緑のリサイクルのパイオニア企業として、これからはあらゆる場所で発生する木質バイオマス資源を有効活用し、循環型社会の構築及び環境負荷低減に微力ながら貢献して行きたいと考えている。

参加者:山主さんにはどの程度のお金が支払われるか。

辻元:山林の整備は結構費用がかかる。出た材を弊社で再資源化し電力の源として利用するのか、山からどのような種類の材が出るかによって変わるため一概には決められない。まだ仕組みとして整っていないので、現在は山主さんと相談しながら進めている現状。

参加者:再生可能エネルギーの賦存量調査によると、当市で使える再生可能エネルギーは太陽光か街路樹等の剪定枝ということが出ている。果たして、剪定枝だけでビジネスが成立するのか。森林系のものがないと成立しないのか。

辻元:現在稼働している木質バイオマス発電所のほとんどは、山林未利用材がメイン。一般廃棄物由来や建設資材廃棄物由来を使う方が稀。それだけで発電するとなるとかなりの量のチップも必要になってくるので、発電所を動かすのは現状では厳しい。

参加者:全国展開しているような企業はあるのか。日本の展望としてどうか。モデル予算ということだが、国の予算を使わずに広がっていけるのか。

辻元:地元を大切にしたい。全国展開でなく地産地消で地元の課題解決をしたい。公的資金は入っていない。山の

事業としてはご近所の山主さんのお手伝いをしていたというところだが、困っている声が広がって活動も広がったらしいと考えている。モデル事業と言ってもまだまだ小さな事業。全国的に木質リサイクル会社はあるが、発電まで考えているかどうかはわからない。

地域の方々とまちづくりの NPO を一緒につくって活動している。大和郡山市は生駒市の少し南に位置するところにある。豊臣秀吉の弟、秀長が城主となった城下町。今はお城は残っていないがまちなかには城下町らしい風景が残っている。金魚の3大産地であることが特徴。今日は、旧川本邸（遊郭）の事例を紹介する。

●話題提供④ 甲賀晶子「地域資源を活用した地域の活性化～郡山城下町の取り組みを事例に～」

私が今いる部署は都市計画を主にやっているところだが、今回はなら・まちづくりコンシェルジュという肩書きでお話をする。なら・まちづくりコンシェルジュとは、知事から個人で任命を受けている職員で、県内の NPO やまちづくりをしている方々を支援することを目的に平成 19 年度に創設され、現在 10 人の職員が任命されている。組織としてではなく個人として任命されていることが特徴となる。行政はだいたい 3 年～5 年で職場が変わって行くが、このコンシェルジュは自分がやめたいというまで継続してすることになっているので基本的に退職するまでやる。主に時間外に活動している。一応兼務で辞令もあるので通常の勤務時間内に活動することもできるが、まちづくりの活動をされている住民に合わせると夜や土日に相談や地域に行くことが多い。地域の方々がやりたいことについて、どこに相談に行けばいいのかを伝えたり、県内や県外の地域の取り組み事例を紹介したりしている。勉強しながら活動している。

今日はコンシェルジュの活動を通して私が関わって来た郡山城下町を紹介したいと思う。私は郡山城下町が出身地で実家がある。現在は



甲賀 晶子

旧川本邸（遊郭）は平成 11 年に大和郡山市が保存のために買い取りした、大正 13 年に建てられた木造 3 階建ての建物。1 階は大広間が多いが、2 階、3 階には小部屋があるという建物。3 階建ての建物で耐震上の問題もある。市が取得した後、耐震問題と遊郭であったという社会的背景もあって反対運動も起きるなど、活用方法が見つからないまま 10 年経っていた。検討委員会も開催されるものの、なかなか進まずにいた。そうこうしているうちに掃除をしようという人が現れる。地域の人と建築系の学生さんたちが何回も掃除をした。綺麗になると何かをしたいという気持ちが生まれる。半年間、月に 1 回程度掃除を続けて綺麗になったときに、以前、地元のカルタをつくったことがあり、そのカルタ大会をしようとなった。また、ゴールデンウィークには建物の一般公開もするこ

とになった。その時の主催は学生さんたちで市との交渉も行った。市民が案内した。長らく閉まっていたので多くの人が見学にきた。

その後も建物を何か使いたいという声が出る。建物の中で大金魚博覧会をしようと、金魚をモチーフにしたアート作品を展示。どうせやるならと、近所の町内会と一緒に夕涼み会を実施。近所の神社でベリーダンスをしたりということをした。この神社も宮司さんが長らくいなかったのが、自治会長が中心となってイベント企画をした。また、はならあと（空き家に現代アートを展示する）では、書道のパフォーマンス、子どもたちに金魚のねぶたをつくってもらうなどをした。その後も、川本邸では、音楽祭、大和なひなまつりなどが展開された。これをきっかけに、地域で活動する人が自然と繋がるようになり、4～5年経ってそれぞれのイベントは定着してきている。

また、旧川本邸は、登録無形文化財に登録され、耐震補強し活動の場ができるようにと市も動き出した。

このような取り組みはこの周辺地域外にも波及していった。酒蔵でも現代アートの取り組みがあった。商店街の空き店舗が増えたので、そこにアート展をした。商店街を年に1回通行止めをしてイベントも行うようになった。誰かが何かをすると、自分たちもしたいと思っていたと、取り組みは広がっていった。このような動きが、空き家の活用にもつながっている。

イベントのときにガソリンスタンドの跡地でコーヒーを出していたのが、そのまま店舗になった。電話ボックスに金魚、テレ金と呼んでいるがこれも川本邸を掃除していたときに出て来たアイデアが実現したもの。豊屋さんだったところは本屋さんに、住まいがカフェになど、

空き家を活用した取り組みが増えて来ている。イベントは年に1回だったのが、今では月に1回は子どもたちが集まるイベントが商店街で行われている。このようなことをやっていると、自分たちのまちの良さに気づく人が増えて来ている。

最近、商店街の人が「商店街のええとこ集めました」という冊子を制作し、自分たちのまちを見直すきっかけになっている。活動が掃除から始まったこともあり、大掃除大作戦という名前前で空き地の掃除などを行っているが、小さいことの積み重ねでまちが変わって行っている。ボーイスカウト、ガールスカウトの協力もあり、将来を担ってくれる子どもたちが関わってくれていることが大事だなと感じている。郡山が変わってきた、活性化してきたきっかけは、掃除だったと感じている。

参加者：耐震の問題はどうなったか。

甲 賀：検討会で出た意見の中で、耐震上問題があることを書面で読み、説明を聞いて了承のサインをしてから入ってもらっている。蛇足であるが、こうすると、何人がどこから来たかが分かる。3階は入らないようにして、2階は20～30人を限度にしている。

参加者：ボランティア、人の動き、購入代金に補助はあるのか。

甲 賀：30万円の補助金があり、別の助成金も申請している場合もあるが、手弁当も多い。掃除道具などは市が設置してくれたものを利用している。

参加者：郡山市との関係、県の立ち位置はどのようなものか。

甲 賀：コンシェルジュの役割で言えば、市町

村では住民と距離が近すぎることもあって接しにくいことも。県は住民と少し距離があるので入りやすいかもしれない。県内の市町村にもコンシェルジュを作って欲しいということもあり、生駒市では県内で唯一コンシェルジュがいる。県で仕入れた情報は市に伝えるなどしている。

●コメント

石川(足立区副区長):今日の事例では、「よそもん」がキーワードになっていたが足立区も同じ。北千住の場合も愛着を感じる人は多くいても、誇りに思っている人は少なかった。ところがマルイができて、東京芸術大学ができたことを皮切りに若者が増えた。よそ者と若者の影響を受けて地元住民が変わり誇りをもった人が増えた。

先崎(環境自治体会議アドバイザー/監査役):このところ、参加者が地元に戻って何をすればいいのか、そのきっかけをつかめるような分科会になって来た。何より発表者の目が輝き誇りをもっている。発表したそれぞれの地域が、違う形で谷口さんからの問の答えを出している。吉川さん、馬場さんの話は、まさしく「ないものねだりより、あるもの探し」の事例であった。辻元さんの話は、林業、山村を支えている仕事。これまでは森林組合の仕事だったものを株式会社でやっている。補助金活用も含めて頑張っている。甲賀さんの話では、市町村でもまちなかコンシェルジュがあればいいと思う。また、肩書きを離れて自由に動

けるというのが仕掛け人として大事だと思うし女性の参画も大事。人づくり政策を行政としてするといい。

●ワークショップまとめ

○甲賀さんの話に関心を持ったグループ

人との出会いが重要。今夏の機会も次につながる。自分が積極的に色んなところに出て行って次ぎに活かせるようにしたい。人づくりが大事だが、行政は上手ではない。

○馬場さんの話に関心を持ったグループ

実践なき理論、理論なき実践、どちらもダメ。ハードルを高くしているのは誰かを見極める。自分がやっていると、自分が他所者・若者で、専門家であることを忘れてしまう。人の存在はやはり大きい。あの人がいるから支えよう、続けようという思いも生まれる。謙虚さも必要、田舎では出れば叩かれる。どうすれば協働できるのか、取り組みとして一般化まではしていない。

○辻元さんの話に関心を持ったグループ

地域資源を見つけることに対して、困ったことから資源が見つかるのではないか。外部の人の目が大事なと同時に、よそ者だけでもダメ。地元の人、企業、ビジネスモデルになるような相談ができれば。行政は規制をしないで、良い取り組みをPRしては。事業は地元の人に相談してもらったところから出発した。これからもそんな声を大事にしたい。

○吉村さんの話に関心を持ったグループ

きっかけは危機感だった。危機感を行政が

くることを今やっていて、まちを歩いてもらっている。問題意識をもって話すといろんなアイデアが出て来る。リーダーは町会長、コーディネーターは専門家で、建築士、土木などのコンサルタントとして入ってもらう。組織化とリーダー、危機感をあおることが大事。

先 崎：「ものを活かす、人が動く、心をつなぐ」がキーワード。出会う場、学ぶ場、新しい経験・知識をもらう、関係の質(より良い関係をつくること)が必要。最初は個人プレーでもできる。活かして行くときには組織を作ったり、協働で活かす取り組みを進めるプロセスが必要。

谷 口：この出会いがそれぞれの地域、生駒の持続可能な地域づくりに生かせてもらえたらと思う。

第10分科会 地域資源活用型まちづくり(午後)

「環境と観光、まちの魅力発見」(フィールドワーク)

【コーディネーター】

認定NPO法人環境市民 理事 下村委津子

【話題提供者】

① 「Eco-net 生駒のこれまでの取り組み《いこま再発見 よこ道あるき》から《あるいて知ろう・見つけよう いこまの宝物探しツアー》へ」

生駒市環境基本計画推進会議 (Eco-net 生駒) 副代表 矢田千鶴子

② 「まちをおもしろがる発想 エコシティの姿とエコシティ実現のためのアプローチ」

認定NPO法人環境市民 理事 下村委津子

【会場】北コミュニティセンターISTA はばたき

下村: 午後は、午前中にでてきた「地域資源を誰が見つけて、どのように活用するか」というキーワードを、「まち歩き」というフィールドワークを通じて考えて欲しい。水俣市の吉本氏が提唱する「ないものねだりから、あるもの探し」を実践して欲しい。まず、生駒市での実践事例から紹介してもらおう。

●話題提供① 矢田千鶴子「Eco-net 生駒のこれまでの取り組み」

生駒市の環境基本計画の推進組織として誕生したのがEco-net 生駒。各部会に別れて活動をしているが、その中で「まち・みち環境部会」が、実践している活動をご紹介する。

計画策定時には、色々な課題を見つける術として「まち歩き」を想定していたが、実際に活動している「よこ道あるき」では、課題を見つけるより、生駒の歴史や文化、観光地としても優れた情報などを、一般市民に紹介する催しとして展開されてきた。最初のステップとしては良い取り組みだったかもしれないが、さらに進化した活動にする必要がある。ガイドがいるわ

けでもなく、観光地を案内するというだけでもないけれど、少しずつ生駒のいいところ、宝を多くの人が見つけて、生駒が大好きになってくれたらと願っている。

「よこ道あるき」の成果としては、

- ・多くのコースを紹介できるようになった。冊子にまとめてある。
- ・Eco-net 生駒以外の団体と連携がとれるようになった。

これから、第2ステージに入るところ。本来のまち・みち部会がめざしていた姿に進化させていきたい。

●話題提供② 下村委津子「まちをおもしろがる発想 エコシティの姿とエコシティ実現のためのアプローチ」

私からは、まち歩きは「まち歩きは参加者の合意形成と学びのプロセス」となることを伝えたい。お互いの価値観の違いを知り相互に働きかけながら情報交流をしている。まち歩きはまちの課題を解決するための手段となる。現状を認識し、お互いで共感し合い、そして得た情報をきちんと整理し発想に活かすという流れが

必要だ。まちはいろんな要素があって構成されているが、立場を変えてまちをみると違ったものが見えてくる。また、そこに存在するものには必ず意味がある。なぜそこにあるのか、少し前までの形と変わっているのか等を意識しながら道を歩いて欲しい。そうすることで、地域にとって本当に必要なものは何か、大事にしたいもの、残していきたいものは何なのかを自然と見えてくるはず。

NPO 法人環境市民では、設立した当初から「エコ修学旅行」というプログラムを開発した。修学旅行というマストツーリズムをエコツーリズムに変える試みだ。生徒たちには、京都のまちで「感じたこと、気づいたこと、興味を持ったこと」を見つけマップづくりをしてもらった。生徒たちの見る目ははっきりしている。京都のまちの素敵な部分と、課題も一緒に見つけてくれた。このプログラムは生徒たちが地元に戻った後、同じようにまち歩きとマップづくりを行い地域の良さと課題に気づいてくれることを目的としている。そのきっかけを修学旅行でつくりたいというものだった。



下村 委津子

水俣市の事例を紹介する。水俣病によって家族間の絆すら築きにくくなっていた時、自分たちのアイデンティティーの再構築をしようとした。住民が地域をよく知り、大事にしたい宝も見いだしに行くことを「水環境マップづくり」を通して実践し、モノだけでなく水俣の宝である人を見いだし「お宝大図鑑」がつくられた。それらが基礎となって「村まるごと博物館」という施策が展開されている。村まるごと博物館では「生活学芸員」「生活職人」が存在し、訪問した人々に地域に住む人だからこそ話せる地域にあるモノのストーリーを紹介している。道に生えている何でもない植物や、田んぼの石積み、川にある大きな石など全てに物語がある。説明を聞き出すと、数メートル歩くのにとっても時間がかかってしまう。しかし、訪問者はそんな話が面白い。地元の住民はそれまで当たり前だったことが大切なこととして輝き出すことに気づく。もっと磨こうという意志が働く、他所の人たちが注目することで自分たちの地域がもつ価値をあらためて感じる。まさしく「ないものねだりから、あるもの探しへ」という流れ。水俣の頭石（かぐめいし）地区では、年間住民の数以上の人が訪れ、経済効果も生まれている。何よりまちが綺麗になり住民の人たちが生き生きとしてきた。

京都のまちでの事例を紹介する。通過交通ばかりが目立ち人が歩きにくい三条通りだったが、今では人の方が車より優先されている。なぜ変わったのか。地域の人が道やまちに関心を取り戻したから。自分たちのまちがこんなふうになったらいいなというのを具体的に思い巡らせ、地域の人たちが共通認識としたからだ。

みなさんも、観光ではない「まち歩き」を風の人として楽しんで欲しい。新たな視点や生駒

の宝、課題を見つけて、生駒のみなさんにプレゼントして欲しい。そして、自分たちの地域に戻ったときに同じような視点でまちを見つめ、宝を見いだして欲しい。

歩くときには色々な立場になると面白い。訪問者、地元の人、外国人、子ども、お年寄り、時には虫や生きものになってみるのもいい。なお、まちを歩く際にヒントとなるチェックシートがあるので、自分がどんなことに興味を持っているのか、どんなことに期待するのか各自でチェックし、グループごとに共有を。グループにはファシリテーターがつくがガイドはしない。みなさんで歩きたいところを歩いて欲しい。

●マップ作成後の発表まとめ

- ・ 生駒は歴史的にも文化的にも豊かな地域であることがわかった。お寺でもご住職がわざわざ話しをしに来て下さるなど温かみが感じられた
- ・ 自然が残る散歩道となるような場所があった
- ・ 市民が整備している場所を見つけた。活発に活動していることが想像できる
- ・ 道路を横断する信号が短く、車を通すことが目的になっているよう。人が渡ることを考えると、もう少し横断時間を長くするなどの配慮が必要
- ・ 昔ながらの民家が並ぶ景観が残っていた。気持ちが安らぐ風景だった
- ・ まちの部分と田舎が混在
- ・ 斜面地に家が建っていることに驚いた。あの斜面をのぼったり降りたりするのは大変ではないか。自転車が置かれていたので利用されていると思うが大変そう。

- ・ 昔は田んぼであったろう場所が、今では手入れされることなく放置してあったのがもったいない
- ・ 自分の住む地域でも同じような風景があると思う。帰ってから再確認したい。

下 村：地域の将来像を描くときに、地域の現状を知ることは重要。そして、紙で見ているだけでなく、みんなで一緒にまち歩きをすることで、同じものを見て感じて、同じ時間を過ごすことで共通認識は深まる。まち歩きの手法を使えば、様々なことに応用できる。

本来はこのプログラムは1日かけて進めるものだが、今回はほんの触りの部分だけ体験してもらった。どうか地元に戻ってこの手法を自分たちのやりやすい形にアレンジして実践して欲しい。



ワークショップの様子